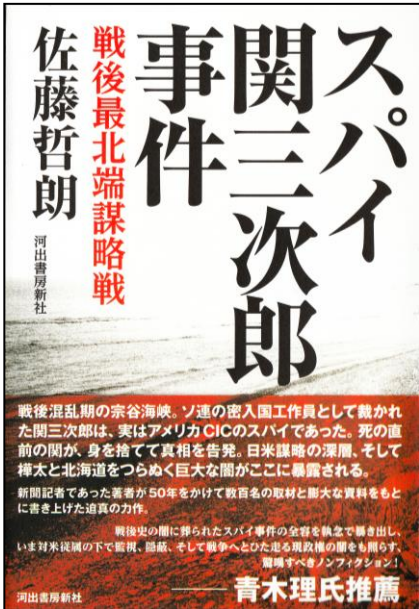


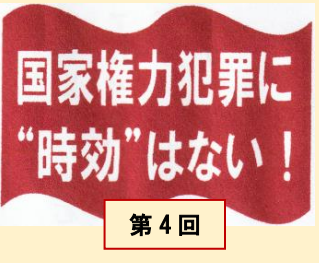
現代政治につながる謀略事件

“国家権力犯罪”の暗部を知る



著者の佐藤哲朗さんは、本書に同封されて届いた手紙で次のように書いています。「(本書は)あの戦後混乱期に日本最北端の海・宗谷海峡を舞台にして米ソ日を巡る『国際スパイ事件』の闇の真相に迫ったものです。65年前の事件ですが、その源流を遡れば現代政治にも深くかかわっています。安倍政権下で成立した『スパイ防止法』(特定秘密保護法)、そして戦争への道につながる集団的自衛権の行使、この危うさに連なる事件です。戦後の特異な時代背景の中で起きた特異な事件だといって闇に葬っておくことはできない。いつか来た道へは、決して逆流させない、そんな思いも込めました」

(福島 清)



「戦後混乱期の宗谷海峡。ソ連の密入国工作員として裁かれた関三次郎は、実はアメリカのCICのスパイであった。死の直前の関が、身を捨てて真相を告発。日米謀略の深層、そして樺太と北海道をつらぬく巨大な闇がここに暴露される」

これは、本書の帯に刷られたCMで、いささか誇大ながら一言で紹介すれば、こうなる。読んで損のない面白い本であることは間違いない。

面白さの第1は、冤罪とは、こうして創られるという手口が学べることだ。関は密入国工作員として拘束された。ソ連領となったサハリンに住み、パスポートなしで宗谷海岸に上陸したのだから密入国となる。警察もそう思った。だが、そんな法律はない。法が密入国を問うのは外国人に対してで、日本国民が日本の海岸に上陸したところで罪に問われるわけもない。そこで法律をさがしまくり、関が持っていた日本円をサハリンから持ち込んだと自供させ、密輸の罪で逮捕することにした。

関は、全て自供している。裁判でも否定せず、争わず、起訴状通り、自供通り罪が確定した。自供調書は何通もあり、実をいうと相互に矛盾したり、明らかな事実誤認、虚偽もあるのだが、個々の1通の中ではつじつまが合い、かつ克明で具体的だ。しかし、関は漢字が読めるのは自分の名前程度で、仮名だってすらす

らとは読めない。著者・佐藤哲朗は、この肝心も見抜き、第三者からの証言も得て確かめた。

つまり、調書は全て捜査官の作文だった。そも、調書は捜査官が書き、書いたものを容疑者や当事者に読ませ、押印させることになっているが、関の場合はこれも読めない。しかも調書は詳し過ぎる。日記や参考書でもなければ思い出せないことまで克明に書かれている。留置場の関には土台無理な話だった。

面白さの第2は、逆転の妙だ。なにしろ謀略の世界であり、真偽、思惑、工作、失敗が入り乱れて、全てが錯綜している。そこで、著者は、結果として判決に採用された調書、証拠の類を「A判定」と名付け、これによって事件の流れをたどり、その流れによる矛盾が極まったところで、「A判定」が棄却していた調書や証拠を復活させて「B判定」とし、事件の骨格、流れを見直してみせる。すると、ソ連諜報機関の仕組みだ謀略計画として、調書にも記載されていた内容が、実はアメリカの機関(CIC)の作文した架空の謀略であり、アメリカ側の謀略意図そのものを表しているとわかる。同じ証拠(調書)が、ソ連追及からアメリカ追及へと一気に逆転するのである。

実のところ、担当検事が「何せ、この事件には証拠というものがない。頼りは本人の供述だけ」と、後に著者に述解したように証拠とい (2面へ)

(1面から) えるものがない事件だった。それは「B判定」によって事件を見直すにあたっても同様になる。

著者としては、「B判定」に合理性があり、説得力もあると踏むのだが、裏付けはない。だが、それが却って著者の真相究明本能をたきつけた。けっこうしぶとい。徹底して関係者を洗い出し、足を運んだ。本書冒頭の3ページにわたって「主な登場人物」として80人余の実名を挙げていますが、既に死亡していたひとや国外に出て消息のとれなかったひとを除き、足を運んでいる。当の関三次郎には都合6度会っている。「はしがき」で、「取材した関係者は数百人を超え、走行距離は延べ四万キロに及ぶ」と書いているが、それほど誇張はない。

そして面白さの第3は、人は、やがて本当のことを言う。だ。既に本書を読んだひとは気づいたかと思うが、I・Kを除き、登場人物は全て実名で出ている。ここが著者のこだわりでもあり、証拠のない謀略の話で登場人物がA、B、Cじゃ仮説にもならない。実名で証言してくれる人を増やすことによって事実の担保とする。徹してみれば徹し得るものだ。中には「本当のことを言うが、対象が生きている間はばらさんでくれ」という人も、1人、2人ではなかった。そして条件が整うまでに50年を要した。

謀略を探れば、謀略がまた別の謀略を引き出してもくれる。たとえば、共産党の謀略で確定判決となった警官殺しの白鳥事件、この裏には、もう一つの殺人事件があり、判決を覆す関連性が明かされている。

闇は、放っておけば何時までも闇だが、執念をもって切り込めば、裂くことも可能だ。それには知る人を探し出し、聞き出すが一番。どうやって探し出し、どうやって会い、どうやって聞き出したか、その過程も明かされていて、引き込まれる。最後には、当事者中の当事者・関三次郎が自ら真相を語り、強者が弱者を嵌める理不尽を告発している。

加えて、もう一つ、著者は取材、執筆を通して、現代とのかかわりに視座を据えている。著者自身「安倍一強政権の暴走を見るにつけ、戦後70年の平和への積み上げを無に帰そうとする政治姿勢は、謀略によって戦争に引き込んだ戦前はもとより、筆者が調べ上げた戦後史の闇の正体とも生き写しに見えてくる」と述べ、冒頭に引用した帯の後半は「戦後史の闇に葬られたスパイ事件の全容を執念で暴き出し、いま対米従属の下で監視、隠蔽、そして戦争へとひた走る現政権の闇をも照らす、驚嘆すべきノンフィクション！」で締めくくっている。

*

著者・佐藤哲朗は、旧・樺太生まれ(1939年)の旭川(北海道)育ち。中学の社会科で旭川地裁を見学、関三次郎の公判に出合った。北海道学芸大学(現・北

海道教育大学)を出て、毎日新聞社に入る。札幌、東京、名古屋とめぐり、一貫して社会部畑。司法、厚生で腕を揮い、編集委員で退社。公益財団法人・認知症予防財団の立上げで中核を担い、常勤理事で退団。

(おおすみ・ひろんど)



以下は、本書掲載の「参考文献」の一部です。
国家権力の謀略と対決してきた歴史の証言です。

『日本占領軍その光と影』(上) 思想の科学研究会編(徳間書店) / 『占領史録』(上・下) 江藤淳編(講談社学術文庫) / 『日本占領史1945-1952』福永文夫(中公新書) / 『知られざる日本占領 ウイロビー回顧録』C. A. ウイロビー(番町書房) / 『敗北を抱きしめて』(上・下) ジョン・ダワー(岩波書店) / 『占領軍の犯罪』猪俣浩三(図書出版社) / 『キャノン機関からの証言』延楨(番町書房) / 『国民講座・日本の安全保障 第8 自衛隊論』神谷不二ら共著(原書房) / 『自衛隊 知られざる変容』朝日新聞「自衛隊50年」取材班(朝日新聞社) / 『日本再軍備—米軍事顧問団幕僚長の記録』フランク・コワルスキー(中公文庫) / 『昭和史—戦後篇』半藤一利(平凡社) / 『軍隊なき占領』G. デイビス、J. ロバ-ツ(新潮社) / 『アメリカから来たスパイたち』大野達三(新日本新書) / 『日本の黒い霧』松本清張(文藝春秋) / 『激動の現代史五十年』大森実(小学館) / 『歴史を動かした昭和史の真相200』阪正康(日本文学) / 『日本の黒い星』A. アクセルバンク(朝日新聞社) / 『日本の謀報』島山清行(番町書房) / 『謀略の構図』吉原公一郎(ダイヤモンド社) / 『謀報事件判決集』謀報事件判例研究会編(東京法令出版) / 『謀略列島—内閣調査室の実像』古原公一郎(新日本出版社) / 『オホーツク謀報船』西木正明(角川書店) / 『冷戦史』松岡完他共著(同文館出版) / 『秘密のファイル』(上・下) 春名幹男(共同通信社) / 『陰謀と謀報の世界』ジヨツク・ハスウエル(白揚社) / 『葬られた夏—追跡下山事件』諸永裕司(朝日新聞社) / 『日本警察の秘密』鈴木卓郎(潮文社) / 『戦後警察史』警察庁警察史編纂委員会(警察協会) / 『警察庁長官の戦後史』鈴木卓郎(ビジネス社) / 『樺太終戦史』樺太終戦史刊行会編(全国樺太連盟) / 『引揚げと援護三十年の歩み』厚生省援護局編(ぎょうせい) / 『稚内市史』稚内市史編纂室(稚内市) / 『安保法制の何が問題か』長谷部恭男編(岩波書店) / 『スノーデン 監視大国日本を語る』エドワード・スノーデン他(集英社新書)

住井すゑさんが書きたかった真意は何か

新刊紹介 サワダオサム著『わたしはこう読んだ「橋のない川」』

闘う新聞配達労働者だったサワダオサムさん（85歳）が『わたしはこう読んだ「橋のない川」』（文芸タイムス社刊、限定400冊）を刊行した。

本書は、「橋のない川」全七部の概要「幸徳秋水」「ホイットマン」「天皇制」「水平社宣言」「橋を架ける」の6章からなり、最後に三室勇さんが解説「この本を読むみなさまへ」を書いている。

サワダさんは新潮文庫版全7冊を都合6回通読し、あわせて「橋のない川」に引用されている章句の原典を全て読み込み、さらに「橋のない川」にかかわる、住井すゑさん自身を含む論者を読み込んだ。その上で、

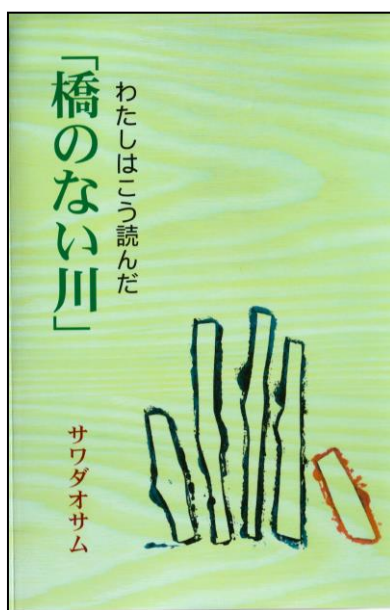
幸徳秋水から水平社宣言にいたるテーマごとに、「橋のない川」の骨格となる章句を再構成して引用し、その後サワダさんの考察による関連論者の重要部分を「加えて一言」として採録している。つまり「橋のない川」をもって「橋のない川」を語らせるという魅力ある「こう読んだ」となっている。おそらく住井すゑさんは川の向こうでこれを読み、一番刮目しているのではないかと想像している。サワダオサム個人誌「壁」第37号に掲載された2人の感想（抜粋）を紹介する。

*

日本の現状は住みずらく、希望がありません。経済、経済と口先で叫んでも、非正規に働く人たちはふるえるばかりです。二千万円など夢の話で、年金暮らしの年寄りにも、未来の主演である子どもたちにも十分な光はあたっていません。

白昼、目に余るヘイトスピーチを許している差別、偏見が人の集まる場所、学校や職場、街路などに冷たく息づいています。古くはハンセン病患者への非道な扱い、多様に生きようとする身体障害者への心ない眼、そこに生じた相模原の多数殺傷事件。新型コロナ感染者が拡大するなか医療関係者が職場でバイ菌扱いのいじめを受けていると、日本災害医学会が抗議声明を出すほどの異常な様相です。

国会では、悪政を続ける無知、無恥の安倍の答弁にみるように、米国隷従を国益と偽り、桜や検事長人事がらみで法治国家でないことを自ら曝しました。すべて自明のことが自明でなくなり、日本が壊れ始めています。そんないまだからこそ、「サワダ本」が掲げる差



別、自由平等、反戦、天皇制など大きな課題に向き合う大切さを思います。（里見和男さん）

*

私は、住井すゑの『橋のない川』を一度も読んだことがありませんでした。それで、サワダさんの新著が刊行される前に目を通しておこうと思い、第一部～第七部までの全巻を3回に分けて飯能市立図書館から借りて、「3.11 東日本大震災の日」までの4週間、100時間ほどをかけて読了しました。

最初のうちは、原本を読み終えた直後のためか、住井すゑの抜き書きだけかと思ふう感じで違和感を覚え

ました。しかし最終章に近づくにつれサワダさんの思惑が次第に垣間見え、さらには具体化するにつれて私の意識もそれに同調していきました。

『橋のない川』は、天皇制と部落差別という重い課題を描いた作品であり、今もなお、それが突き付けられた「現代」小説と言えるのではないかと考えています。明治後期から大正時代の貧しい庶民生活が、機知に富んだ会話を通して「陽気に」描かれているくらいはありますが、否、それはむしろ「笑い」によるしかない、底辺を生きる庶民の暗鬱とした生活を表現する手段と言えるのかもしれない。不条理な格差が支配していた国家社会の一場面を投影した作品には違いないと思います。（川島金次さん）

*

サワダさんは、1935年京都生まれ。京都府立朱雀高校定時制鳥羽分校を中退し、1960年上京。朝日新聞販売店に住み込み、「新聞屋」（新聞配達労働者）となる。以後、京都、大阪、兵庫、滋賀の販売店を転々。その経験を通じて、新聞産業の暗部である新聞販売制度の実態を告発し「新聞屋かて人間なんや」と叫び続けた。1980年1月滋賀県新聞販売労働組合を結成、1981年1月以降、全国新聞販売労働組合の副議長、事務局長、顧問を歴任。1989年4月からは毎日新聞瀬田駅前販売所の経営を引き受け、一切の景品販売を止め、新聞販売のあるべき理想実現を目指した。2006年脳梗塞となり右手不自由ながらさらに「三好十郎論」「辻潤と尾形亀之助論」を書くと言っている。

（福島 清）

台湾の強さと民主主義

コロナウイルス対策で考えるべきこと

毎日新聞政治プレミアで、福岡静哉・毎日新聞台北特派員が「麗しの島から」と題して書いている2つの記事に注目です。4月20日付は『『天才大臣』だけではない台湾の強さとは何か』です。

福岡記者は次のように書いています。

新型コロナウイルスへの対応を巡り、台湾の内閣が「専門家ぞろいだ」として日本でも注目が集まっている。台湾では、「鉄人大臣」の異名を取る陳時中・衛生福利部長（衛生相）や、IT担当で「天才」と称される唐鳳（オードリー・タン）政務委員らの活躍が目立つ。主に国会議員から閣僚を選ぶ日本で、パソコンをまともに使えないのにIT担当相に就任するなど専門性を度外視した人選が行われるのとは対照的だ。ただ、国会議員が閣僚になることを禁じる台湾の制度にもリスクはある。

では何がポイントなのか。日常的な取材や政治学者の話を通じて私が感じた台湾の強さの源は、政治をチェックする有権者の力だ。

（中略）

台湾ではデモが日常的に起きる。民意は揺れ動きやすく、政治はしばしば混乱する。だが、こうした有権者の政治に対する熱い視線こそが、民主主義を前に進めるエネルギーだろう。SNSでは「日本にも、台湾のように優秀な専門家の大臣がほしい」という嘆きをよく目にする。しかし参考にすべき点はむしろ、政治を動かす民衆のチェック能力だと思う。

*

4月22日付は「民主主義の台湾が徹底した防疫に成功しているのはなぜか」です。

福岡記者は次のように書いています。

徹底した防疫は民主体制でこそ可能

防疫と人権のバランスを取ることは極めて難しい。緊急時に一定の私権を制限し、市民の協力を得るための大前提は、多くの有権者が政府を信頼していることだ。台湾では陳時中本部長が毎日、専門家と共に欠かさず記者会見を開き、記者の質問が途切れるまで答える。説明責任を果たそうとする姿勢が、ひしひしと伝わってくる。

（中略）

コロナ問題では「民主主義国家よりも、強権的な独裁国家の方が効率的に感染拡大防止を図れるのではないか」という見方も出ている。だが、強権的な政権は「不都合な真実」を隠す傾向がある。台湾の例は、民主主義体制でこそ徹底した防疫が可能であることを物語っており、「強権肯定論」への鮮や

<コラム> 冤罪忘れるな! ④

少女たちが体で伝えた

アメリカ・ベリー記者の特集記事

日米開戦の12月8日、レーン家を襲った出来事を最初に活字にしたのは、アメリカ人記者キャサリン・F・ベリーだった。伝えたのは、レーン夫妻の双子の末娘ドロシーとキャサリン、当時12歳。両親から引き裂かれ、札幌からアメリカ東海岸へと送還された過酷な船旅を身を以て語ったことによる。掲載紙、掲載日とも把握できていないが、1943年11月の紙面だった。



日本での
薄らぐ
湾岸州の双子姉妹
死んだと諦めていた両親が
グリップスホルム号で帰国

この時点では事件の概要はもとより、なぜ幼い二人に送還を強いたかの経緯も定かになっていない。記事もまた、特定の何かを告発したり、非難するものとはなっていない。ただ、大人の理不尽を読み込み、二人に寄り添い、二人の未来を願うまなざしの間記録となっている。半面、二人にかかわった大人たちの振舞いもまた鮮明に浮かび上らせ、本件冤罪の解明につながる情報の引き出しをも可能にしている。

◆ ◆ ◆

「スパイ冤罪事件」の真相に迫る決定版（本会編）

『引き裂かれた青春—戦争と国家秘密』花伝社刊

第1部＝冤罪の真相 第2部＝冤罪事実の条条検証
資料編＝判決全文、軍機保護法全文、年表
特別添付＝重要事項索引

申し込みは本会事務局までFAX・メールで（1面上部題字横に掲載）。送料税込み2300円。後払い。

かな反証だ。

徹底した防疫のためには、一定の私権の制限はやむを得ないと思う。それに伴うマイナス面を乗り越えるためには、情報公開や政府の意思決定の透明性、説明責任、そして政権が民意を的確に把握する力が不可欠だと思う。台湾の成功がそのことを示している。

*

世界的なコロナ禍は、平和・人権・民主主義を踏みにじってきた人類に対する警告であるように感じます。「国家権力犯罪」「災害便乗資本主義」を許してはなりません。（福島 清）